大人が絵本を
第5回　知っていますか？

司書・読書アドバイザー　安藤　宣子※
小児歯科医師　濱野　良彦※※
※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）
※※ 医療法人元気が湧く　理事ファウンダー

○53歳で絵本作家デビュー！?

ガブリエル・バンサンは1928年生まれのベルギーの女性絵本作家で、53歳で絵本作家としてデビューしました[1)]。

私は、バンサンの絵本に出会うと心がザワザワし、司書の職業魂を強く揺さぶる何かに気づかされるのですが、それが何かすぐには分からないのです。これがバンサンに不思議さを感じた最初で、そのまま導かれるように数冊のバンサン作品を見ていると、強烈に魂を揺さぶられる瞬間が訪れたのです。それは身体の芯を、そして心の中心を感動の矢が射抜く何者かが、静寂とともにシュシュシューンと通り過ぎていきました。

司書職とは、文字や言葉、文章を管理する専門職ですので、文字や言葉は「生命」です。ところが「文字のない絵本」、「絵だけの絵本」、しかも色彩のない鉛筆画でのページ構成は、文字を越えた魂に触れ、心に深く焼きつきます。「絵が言葉を語っている！」、「絵がグイグイと絵本の中に引き寄せていく！」、「なんだ！この力は？なんだ！この感覚は？」といった興奮をもってバンサンの世界に誘い込まれていくのです。

ガブリエル・バンサンは、ブリュッセルの美術アカデミーを卒業してから絵本作家としてデビューするまでに、30年もかけた遅咲きの作家です。「くまのアーネストおじさん」シリーズの第1作『かえってきたおにんぎょう』（BL出版）が世に出されたのは1981年、バンサン53歳のときです[1)]。しかし、新人のものではない描画力は多くの人々を魅了し、瞬く間に世界的な絵本作家として知られるようになります。

今回は「文字のない絵本」の魅力について、ガブリエル・バンサン作品を読みながらお話しします。

○ベルギーのブリュッセル生まれ！

絵本作家ガブリエル・バンサンを短期間で高名にしたもの、それは人並み外れたデッサン力です。デビューの翌年、本名のモニーク・マルタン名で出した絵本『アンジュール』（BL出版）[1)]は、大胆で太い鉛筆線での描画と、細い線が表す繊細な描写、そして鉛筆の濃淡というデッサンによるモノクロの世界ですが、読者に色を創造させる力があります。その絵を読むだけで捨てられた一匹の犬の悲しみや、孤独な魂が出会ったものとの喜び、愛、幸福感が読者に伝わってくるのです。読む者に絵が語りかけ、無限の広がりとしてイメージできるのです。

ガブリエル・バンサン 作
『アンジュール』
BL出版，1986

このような『アンジュール』を生んだバンサンの類まれな描画力は、生まれ育ったベルギーの美術史が背景にあります。ブリュッセルは、ヴァン・エイクからモンドリアン、ゴッホまでが脈々と続くネーデルランド美術の伝統があります。それは、17世紀オランダ絵画の代名詞であるレンブラントやフェルメールを生み、ロイスダールらの風景画を発達させた精神をも受け継いでいるのです。バンサンの絵画の特質である、「空間性豊かなコンポジションや光と影のドラマチックな演出などを通じて、内面感情や精神性を表す」[2)]技法は、オランダ絵画の特徴なのです。さらには、文字のない絵物語の創始者とされているベルギーのグラフィック作家フランツ・マゼレール氏の影響を受けていることも明らかです[2)]。

手にするときは！
ガブリエル・バンサンを

企画　濱野　良彦
構成　木須　信生※※※
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）

○大人を魅了する「文字のない絵本」

「文字のない絵本」を「言葉のない絵本」とも言いますが、本来絵本は文字で表現された言葉か、絵で表現された言葉による本で、「絵が語る」言葉表現が存在しますので、「言葉のない絵本」は存在しないという見方もあります[3]。「絵はすべて言葉の世界で、言葉にならない絵はない」[4]のです。そうです、「子どもたちは絵を読む。絵の中にある言葉を読む」[4]のでしたね。ですから、本稿では「文字のない絵本」と表現しています。

バンサンの作品では、紙の白色も表現の一つに利用し、高い技術のデッサン画、水彩画だけで登場人物の内面感情をシルエットとして表し、景観描写と合わせて読む者に「言葉」として語りかけてくるのです。『アンジュール』で犬が引き起こす自動車事故の場面では、スピード感や事故の生々しさまで伝わり、「キー、キキィーッ！」というブレーキ音や「ドォーンッ」という衝突音が鮮明に聞こえてきますが、登場人物には名前すらありません。物語の冒頭では、自動車から捨てられた犬がその自動車を追って走るときの、「待って」と言わんばかりの「ヴァンヴァン」という鳴き声（読者によって擬声語は異なるでしょう）や、追い続けてどんどん荒くなる息づかいが聞こえてきて、思わずウルウルしてしまいます。情景も心の機微も、そのまま絵の動きとなって物語を躍動させているのです。さらに、文字を使わずに筆力だけで、喧噪や静寂のシーンまでを演出しています。当法人では子どもの歯科治療中に、子どもと対話するツールとして『アンジュール』を用いていますが、色彩がないため子どもの興味を引き出すのは難しいところで、言葉がない分、話す側にはアドリブがききます。

このような、バンサンの生育環境に裏付けられた描画力は、力強さと繊細さの両者をもって読者の心の真髄に訴えかけてくるのです。

○作家と対話する！

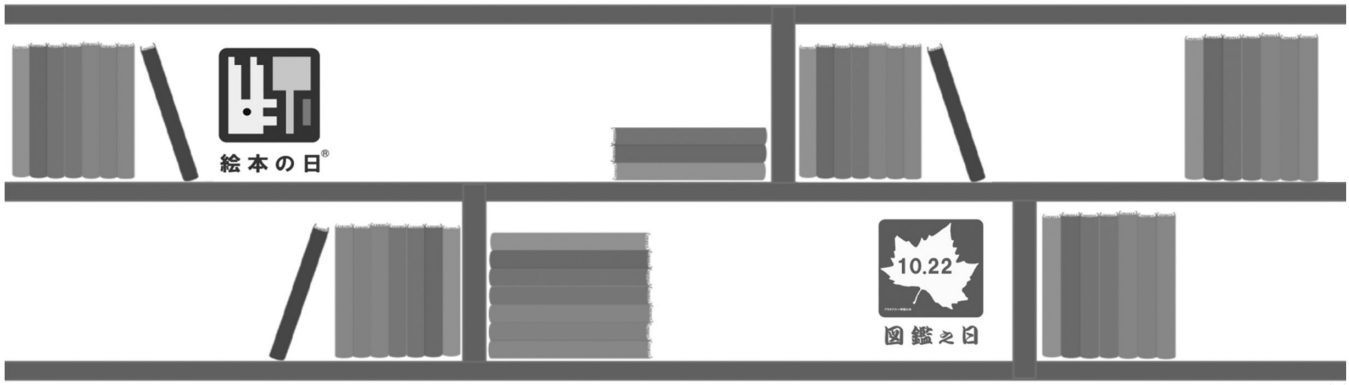
「作家を知る」ということは大人が絵本を手にするときの必要条件です。生育環境による独特の文化が作品に影響するという絵本作家の背景を知ると、その作品世界に新たな気付きが生じ、さらなる興味が湧いてくるのです[5]。

バンサンが鉛筆または筆だけを用いて表す情景や内面感情を「読む」ということは、「絵を読む」読者の知識経験や洞察力、想像力にも大きく影響されることになります。「絵を読む」そのとき、物語に籠められた作者の想いと、読者の人生観が時空を超えて対話することで、作家と読者の魂が遭遇し、読者の魂を揺さぶるのではないでしょうか。絵が放つ魂だけでなく、作家との精神的対話が成立していると感じられます。そしてまた、バンサンが紡ぐ物語により、読者自身の内面と対話するきっかけを与えられることになるのです。それらがバンサン作品に触れた者の心の奥深くにグッと響いてくる理由ではないかと思いますが、いかがでしょうか。

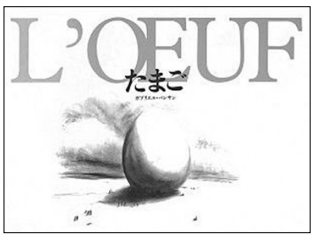
ガブリエル・バンサン 作
『かえってきた おにんぎょう』
BL出版，1981
（「くまのアーネストおじさん」シリーズ第1作）

○ありがとう、ガブリエル・バンサン

バンサンの描画法は『アンジュール』のようなモノクロのデッサンと「くまのアーネストおじさん」シリーズのような水彩画の二種で絵本を創作しています。



「文字のない絵本」は『アンジュール』の他に、『たまご』、『マリオネット』の3冊です。驚く技術は『アンジュール』の鉛筆デッサンに対し、『たまご』は木炭デッサンで表現していることです。この木炭による深い陰影とぼかしの技法が力強さをさらに高め、同じデッサン画絵本であっても『アンジュール』と異なり、バンサン作品に魅力を感じる一因です。『たまご』では、絵だけで表した鳥と人間のやりとりと、鳥の恐ろしいほどの眼光に、バンサンの魂からのメッセージを感じます。『アンジュール』にも増して深い深いメッセージをもつ絵本です。



ガブリエル・バンサン 作
『たまご』
BL出版，1986

『マリオネット』というタイトルと、操り人形を見つめる男の子の表紙絵からテーマがイメージできるこの「文字のない絵本」のタッチもまた、他の2冊と異なり、劇中のマリオネットを危機から救おうとする男の子と人形劇のおじさんとの交流を描いたやさしいタッチのデッサンと物語に、読者は終始、微笑み、穏やかな気持ちになります。バンサンが描いた同じ「文字のない絵本」なのですが、表情が全く違うこの3冊を読むだけでも高尚な芸術鑑賞ができます。

私は『アンジュール』で衝撃を受けた後、『たまご』で心を突き破られ、そしてバンサンの「文字のない絵本」という情報だけをもって心を構えて読み始めた『マリオネット』でしたが、読後思わず「ずるいよ、バンサン」と呟いてしまいました。

ガブリエル・バンサン 作
『マリオネット』
BL出版，1993

バンサンの作品には、デッサン画の絵本だけをみても文字のない絵本と、たくさんの絵に短い言葉を添えただけの絵本とがあります。後者は『ナビル』や『ヴァイオリニスト』などで、シンプルなモノクロ画面の隅に、わずかな言葉が添えられた構成が物語性を高め、絵をより生き生きとさせているのです。『アンジュール』は文字のないことで絵が躍動していますが、これらは絵を邪魔しない選ばれた言葉を添えることで、絵に息吹を与えて

ガブリエル・バンサン 作
『ナビル』
BL出版，2000

ガブリエル・バンサン 作
『ヴァイオリニスト』
BL出版，2001

E-mail
安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

連絡先　福岡市南区大橋3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272　URL http://bibuliokids.jp

いるのです。この技法もバンサンの芸術的伝統を受け継いだ生い立ちによるものだと思えるのです。

2000年に72歳で死去するまで、約20年という短い絵本作家人生のうちに、実に45冊の芸術的絵本を創作してくれたバンサンに感謝と敬意を表します。絵本界に新たな一石を投じてくれたのですから。

○自分の内面と向き合う絵本

バンサンの描く線は真の「生命」を持っていると言われています。私たち司書は、言葉や文章を管理するだけでなく、画家の描く線や絵も大切に取り扱い、芸術作品として子どもから大人まで広く利用に供する使命があります。偉大な作家ガブリエル・バンサンの作品を当館「絵本と図鑑の親子ライブラリー」ではすべて所蔵し、子どもから大人まで親子、家族の皆様で楽しんでいただいています。

「文字のない絵本」は絵が語りかけ、絵を読むという楽しみ方を最大限に示してくれ、「知的な遊び」とも言えるでしょう。絵が語る言葉を読むとき、大人も子どもも、文章にはできないけれどイメージの世界で躍動させることができるのです。絵を読み解きイメージを膨らませる楽しみを味わうことと、魂を揺さぶられることで自分の感覚を研ぎ澄まされることに「文字のない絵本」の魅力があると思います。なかでもバンサン作品は、子どもと大人の境も国境も超えてすべての人が、魂の交信ができる精神性高い絵本だと考えます。

バンサン作品を通して「文字のない絵本」の魅力についてお話ししてきましたが、画家が絵に託した機微を読みとること、それが一冊の絵本と向き合うこと、ひいては自己と向き合うことにもなります。そして自らの魂に癒しを与えてくれるでしょう。

ガブリエル・バンサン 作
『テディ・ベアのおいしゃさん』
BL出版，1995

今どきの子どもたちは、色彩豊かな絵本や派手な絵に夢中になりますが、診療中に絵本を介して子どもたちと対話するには、「文字のない絵本」や「色彩のない絵本」の活用が一筋の道を示してくれていると感じています。「文字がない」「色彩がない」といった静を知り、子どもたちの脳は予感、予知、想像、発見といった「動」の世界に入ってくれると信じています。これを現実にすることが、医療現場で働く私たちスタッフの腕の見せどころだと考えます。

文献

1）今江祥智：絵本作家ガブリエル・バンサン，BL出版，東京，2004, pp.60-77
2）笹本純：絵だけで語るということ，谷本誠剛，灰島かり編：絵本をひらく，人文書院，東京，2006, pp.217-223
3）池田美桜：絵本における文字表現と絵画的表現，国際学院埼玉短期大学研究紀要，28：39-41, 2007
4）松居直：絵本は大人がこどもに読むもの，河合隼雄，松居直，柳田邦男：絵本の力，岩波書店，東京，2001, pp.51-57
5）河合隼雄，松居直，柳田邦男：喪の仕事，絵本の力，岩波書店，東京，2001, pp.168-57